

榮山江流域における 古代集落の景観と構造

The Landscape and Structure of the Ancient Settlements
in the Yeongsan River Basin

李 暎 澈

LEE Youngcheol

はじめに

- ①百済進出からみた都市遺跡の理解
 - ②榮山江流域における集落遺跡の検討
 - ③集落の景観と構造における変化の背景
- おわりにかえて

【論文要旨】

本稿は、榮山江流域の古代集落の景観と構造の分析を目的としたものである。具体的には、榮山江流域（馬韓）が徐々に百済化していく段階において、集落景観がどのような変貌を遂げたのか、という点について、文献資料といくつかの集落遺跡を取り上げながら検討を行った。

まず、馬韓段階の集落の景観と構造について整理した。馬韓系住居址の特徴としては、平面方形を呈する四柱式や、壁溝施設を備えた無柱式という住居構造がある。そして、集落の規模や内容から、大きく一般集落と拠点集落に区分でき、拠点集落は榮山江本流の主な寄港地（と推定しえる地点）や各支流の終着地に形成されている。そして、拠点集落の典型的な事例として、潭陽台木里・應龍里埧遺跡を取り上げて、その内容を紹介しつつ、馬韓のひとつの小国の中心地としての性格を浮き彫りにした。

このような馬韓の集落景観が大きな変貌を遂げる時期が、5世紀中葉以後である。その事例として榮山江上流域の光州東林洞遺跡を取りあげ、集落の充実した規模や内容、交通の要衝という立地、各種の施設、集落中心部にみられる区画などを紹介しつつ、その性格を「百済地方都市」のひとつとして把握した。そして、その都市建設を主導した人物（集団）が、百済王権と直接的な関係を結んでおり、その背景に百済による榮山江流域社会（馬韓）の統合が企図されていたと考えた。

最後に、榮山江上流域の拠点的な集落が6世紀初め頃には急速に衰退し、その一方で中流域の羅州潘南面や伏岩里一帯に高塚古墳や集落が盛行する状況を指摘した。そしてこのような変動が、漢城陥落と熊津遷都という歴史的事件と連動している可能性を浮き彫りにした。

【キーワード】 榮山江流域、馬韓と百済、古代集落、百済地方都市

はじめに

集落は、人間集団が生業の拠り所として居住するとともに、社会生活の基盤となる場所である。よって、集落には集団の構成員が生活をしていく上で必要な様々な施設がそなわることとなる。住居をはじめとして、倉庫、田畑、道路、井戸、広場などは、構成員の生産活動や社会生活と連動して捉えられ、ひとつの景観が完成される。

集落の単位要素の中でもっとも重要なものは、家族単位の衣食住がなされる住居址である。馬韓社会の住居址の最大の特徴は、家族単位の独立した炊事が保障されるカマド施設をそなえている点である。また、住居址の位置や規模、内部施設、占有空間は、構成員の社会的な地位や性格を把握するうえで、重要な資料となる。それゆえに、住居址の配列状態は、集落構造の理解において基本的な枠組みを提供するものとみることができる。

荣山江流域において調査された馬韓～百済時代の集落遺跡は、朝鮮半島のどの地域よりも圧倒的な数量を占めている。集落遺跡は、西・南海沿岸は無論のこと、荣山江本流周辺の堆積地や丘陵地、そして山間の内陸地域まで広く分布している。占有期間が、一、二世代に限定される短期性集落から、数百棟の住居址が重複し持続する長期性集落まで、多様な類型が確認できる。

荣山江流域の古代社会は、馬韓が中心となった三韓社会の出現とともに始まる。以後、馬韓と弁・辰韓が百済と新羅・加耶へと編成される過程の中で、複雑な政治体の変動が進んでいった。これまでの考古学研究において、その変動過程は威勢品（威信財）を副葬する権力者の墳墓（古墳または高塚古墳）資料を通して議論されてきたが、筆者は実生活の基盤となったムラや都市のような集落遺跡を分析することで、接近してみようと思う。

馬韓社会が徐々に百済化していく歴史的な過程は、百済はむろんのこと加耶や日本列島など、多様な勢力との関係の変化の中で進んでいった。本稿において分析する集落の景観と構造にも、そのような多元的な関係変化の内容が確認される。特に、馬韓の伝統的な住居文化と集落景観が、5世紀中葉以後に新たな変貌を遂げる現象が顕著に認められ、高塚古墳の出現とも軌を一にするという点において、急激な社会変動が進行したことがうかがえる。社会変化の主たる要因は、百済との政治的関係の変化の中で進んでいったものとみることができる。

①……………百済進出からみた都市遺跡の理解

紀元後3世紀末、馬韓諸国を代表する目支国を制圧し、古代国家を成立させた百済は、中央集権体制を完成させようと周辺諸国を併合していく。小国併合の目的は、中央と地方という関係の樹立のためであり、漢江以南の各地にそれぞれ領域を有していた馬韓勢力を統合していく政策を採る。その過程において、馬韓諸国の国邑をはじめとする上位集落は、一部は消滅し、一部は百済との新たな政治・経済的な関係網を通じて百済の地方支配の拠点として持続していった[박순발 2014]。

百済の地方支配の拠点となった上位集落の中には、都市的な面貌を備えたものがあり、これは百済の地方都市と本論では捉えることとする。人びとの集住や、一次的な生業からの住民の分離とい

う基本属性を土台として出帆した地方都市の核心要素は、経済的な再分配の関係網の形成にそれぞれ重要な「市」、財貨の集中、そして手工業生産施設と考えられる。あわせて、行政的・軍事的な機能を有する「城」の登場も確認されている[박순발 2014]。人びとの集住は、構成員の多様で特別な活動を可能とすると同時に、職業の分化も進めた。余剰生産物や手工業品を生産するための道具を発達させながら、農耕とは異なる形態の労働に従事する構成員を増やしていった。それによって、行政や宗教儀式のような新たな活動も促されていった。

百済王権あるいは中央勢力が関与した地方都市の出帆は、政治的支配者の決定によって迅速に建設されたものだが、多くの地方都市は現地の構成員の決定によって徐々に成長を遂げていったようである。

栄山江流域における百済の地方化の問題は、大部分の研究者が漢城期ではなく熊津・泗泚期の状況として検討している。漢城様式の百済土器、中国製陶磁器、金銅製冠帽・飾履・装飾大刀などの威勢品、泗泚期の百済石室のような要素の登場時期に注目した見解である。しかし、筆者は百済系の住居類型の登場、集落の景観や構造の変貌など、集落遺跡資料の分析を通して、栄山江流域の百済領域化は、熊津遷都以前の漢城期に進行したものと理解している[이영철 2011・2016a]。

栄山江流域の各地に位置する様々な小国は、5世紀前半までは同様な住居類型と葬墓文化を共有しながら、持続している。すなわち、一辺の壁に粘土材によるカマドを設け、壁溝と四柱式構造（一部に非四柱式も含む）を備えた平面方形の住居形態を好んだ人びとは、溝をめぐらせた梯形の墳丘を築き、木棺や甕棺を複数埋葬する葬墓文化を固守していた。

しかしながら、このような馬韓の伝統的な住居・葬墓文化は、高塚古墳が出現する5世紀中葉に大きな変化を迎えることになる。壁柱（大壁）建物のような百済系の住居類型が伝播、受容されながら、新たな景観へと変貌を遂げた拠点集落が各地に出現し、それとともに、一般構成員から分離した有力層の住居空間が別途に造成される集落構造が完成する。集落構造に顕著にあらわれる構成員間の階層化（差別化）は、葬墓文化にも確認できる。一人埋葬のための高大な高塚古墳が築造され、それぞれの古墳における規模や質的な差異が発生し、地域単位の勢力の間における位階化の構図も確認できるようになる。特に、それまで採用されていた平面梯形の伝統的な墳丘形態が徐々に消滅しながら、方形や円形、前方後円形のような新たな墳形が、相次いで築かれはじめる。

筆者は、このような物質・社会的変化の背後には、百済王権ないしは中央勢力の関係が適用されていると考える。5世紀中葉を前後する時期に、新たに出現したり急成長を遂げる拠点集落は、その多くが都市的な属性をともなっている。拠点集落は人口の流入とともに拡張し、手工業生産体系を広く成長させる足がかりともなった。筆者は、ひとつの政治体として統合しえなかった、馬韓小国段階にある栄山江流域の地域社会が、果たしてその内部的な動力と意志だけで、このような社会的な変化を成し遂げることができたのか、という疑問を有している。

②……………栄山江流域における集落遺跡の検討

馬韓は紀元前3～2世紀に韓半島中部以南の地域を本拠とし、三韓の盟主として出現したとされる。現在のソウル・京畿道、忠清道、全羅道一帯が中心となった。50余国の小国によって構成さ

れた馬韓社会の住居や、集落の景観と構造をうかがい知ることができる文献記録としては、紀元後3世紀に編纂された『三国志』魏書東夷伝と、『後漢書』東夷伝韓条などがある。

・<韓>在<帶方>之南，東西以海爲限，…<馬韓>在西。其民土著，種植，知蠶桑，作綿布。各有長帥，大者自名爲臣智，其次爲邑借，散在山海間，無城郭。

→「韓」は「帶方」の南にある。東側と西側は海を限りとしている…「馬韓」は西側にあり、百姓たちは土着をし、種を植え、養蚕を知り、葛布（綿布）を作る。それぞれに長帥があり、大者はみずからを臣智とし、その次の者はみずからを邑借といった。山と海の間に散在しており、城郭はない。

・其俗少綱紀，國邑雖有主帥，邑落雜居，不能善相制御。無拜之禮。居處作草屋土室，形如冢，其戸在上，舉家共在中，無長幼男女之別。

→その風俗は紀綱が少なく、国の邑に主人（主帥）はいるけれども、邑落が入り混じっていて、なかなかうまく統轄できない。人びとの間に跪拝の礼もない。居所は土の家に屋根を草で葺いているが、その形は墓（冢）のようである。家の戸口は上にあり、家族は全部その中で暮らしている。大人と幼児、男女の区別はない。

・國邑各立一人主祭天神，名之天君。又諸國各有別邑，名之爲蘇塗。立大木，縣鈴鼓，事鬼神。諸亡逃至其中，皆不還之，好作賊。其立蘇塗之義，有似浮屠，而所行善惡有異。其北方近郡諸國差曉禮俗，其遠處直如囚徒奴婢相聚，…乘船往來，市買<韓>中。

→国邑ごとに天神を祭る主人が一人いて、「天君」と名づけている。また、諸国の各地に特別な邑が一つあり、これを「蘇塗」という。そこには大木を立て、鈴と鼓をかけて、鬼神に仕えている。様々な所からこの中に逃亡すれば、彼が引き渡されることはない。そのために盗賊が多くなっている。「蘇塗」の意味は「浮屠」と似ているが、行っていることの善悪には違いがある。その北方の郡に近い国々では、やや礼儀をわきまえているが、郡から遠い国々では罪人や奴婢が混住している…船に乗って往来し、「韓」と交易をしている。

・凡七十八國，伯濟是其一國焉。大者萬餘戸，小者數千家，各在山海間，地合方四千餘里，東西以海爲限，皆古之辰國也。馬韓最大，共立其種爲辰王，都目支國，盡王三韓之地。其諸國王先皆是馬韓種人焉。（『後漢書』東夷傳韓條）

およそ78国あり、百濟（伯濟）はその中の一国である。大きい国は1万余戸に達し、小さい国は数千家あり、それぞれ山と海の間に散在し、土地をあわせると方4千余里程度となり、東西は海を限りとし、すべてかつての辰国である。馬韓が最も大きく、その種を共立して辰王とし、目支国を都とし、韓の地の王として権勢をふるった。その諸国の先代は、すべて馬韓の種人であった。

以上のような記録を参考とすれば、馬韓諸国は4千余里の領域を有し、大きい国は1万戸近く、小さい国は数千戸（家？）の家屋が集まっていたことがうかがえる。また、小国の中の諸集落は、

山や海の間に散在していた。国の中心となる邑落には臣智や邑借とよばれる有力者が存在していたが、その統轄の度合いは強くはなかった。また住居の構造は、土でつくった家に草で屋根を葺いており、墓（冢）の形態に似るという記述からみて、竪穴式の構造であったことがわかる。

1. 馬韓集落の景観と構造

(1) 馬韓集落の特質と変遷

馬韓系住居址については、早くに김승욱 [2000] によって検討がなされた。氏は忠清南道天安より以南の馬韓系住居址の中で、内部に四柱穴が設置されたものが非常に多いことに注目し、それを平面が「呂」字形または「凸」字形を呈する住居や、六角形住居と区分し、馬韓系住居址の代表的な類型として設定した。四柱式住居址は3～5世紀にもっとも盛行した住居類型であり、四壁の隅に柱穴を設置する構造を呈する。これは百済や加耶地域の住居址とは区別され、馬韓の領域である天安以南の中西南部一帯に集中している。また、平面が方形を呈する住居址の内部には壁溝施設を備えるものが多く、一辺の壁付近に設置されたカマド（もしくは炉）の材料がほとんど粘土である点も特徴である。

したがって、四柱式住居址は4本柱、粘土によるカマド（粘土造付けカマド）、壁溝施設を基本とする完成された住居類型とみることができる。その一方で、天安以南地域の3～5世紀代の住居址の中には、造付けカマド、壁溝施設を備えているにもかかわらず四柱式ではなく無柱穴式（非四柱式）の構造を呈する資料もひんぱんに確認されている。これもまた、馬韓系の住居類型に含めることができる。

住居の平面形は方形系が多数を占め、四柱式と非四柱式（無柱穴式）が主流をなす。住居址は一辺の長さが3～4m程であり、面積は20m²程である。造付けカマドⅠ・Ⅱ式を備え、壁溝施設はⅠ・Ⅱ類型が中心である。栄山江流域では、四柱式住居址が3世紀前半～4世紀初め頃に出現し、主に西海岸や栄山江水系周辺の丘陵状台地に立地する。四柱式住居址は4世紀前半～後半にかけて、一般的な住居とは差別化され、5世紀に入ると最も盛行する。非四柱式（無柱穴式）の方形系住居の類型は、四柱式類型にさきだって出現し、6世紀代まで持続的に確認される。

馬韓系の住居類型によって構成される集落は、紀元後3～4世紀に運営された遺跡において主に確認される。馬韓系集落は規模とその内容によって、小村と中村規模の一般集落と、大村規模の拠点集落に区分される [이영철 2011]。

一般集落は、5～20棟程の住居址によって形成され、重複の度合いが低く、構成員の数にさほど変動がみられなかったことがうかがえる。住居址ごとの規模の差異があまり認められず、5棟程度で構成された住居群が、複数集まることで集落の景観を成していた。構成員の生業は主に農業、漁撈、狩猟などのような生産活動に限定される傾向にあり、その一部は土器製作を主とした手工業活動を担っていた。一般集落の墳墓としては、単独墓あるいは低墳丘規模の古墳が2～3基程度築かれた。埋葬施設は甕棺や木棺、土壙が中心である。

拠点集落は栄山江本流の主な寄港地や、支流水系の終着地に形成される。拠点集落の景観を成す遺跡が本格的に登場する時期は、4世紀中葉以後である。拠点集落の成長は、海上・河川交通路を利用した対外交流活動が活発となる中で本格化し、特に鉄素材の交換物が重要であったようである。

咸平地域の大成・昭明・中浪・礪岩、羅州地域の長燈・道民洞・ダシドゥル（다시들）、務安地域の平林・둔전・良将里、霊岩地域の仙皇里、海南地域の新今・分吐、潭陽地域の台木里、光州地域の雙村洞、康津地域の楊柳洞、長興地域の枝川里・上芳村・葛頭などの集落遺跡が確認されている。拠点集落では、血縁や出自を同じくする構成員による 5～10 棟程の住居群が、最低でも 4、5 群以上確認される。住居群ごとに規模が大きい住居址が 1 棟ずつ確認され、ひとつの住居群を代表する者を抽出することが可能である。その一方で、住居群の代表者の間における差別性は明確ではなく、拠点集落全体を管掌するような有力者の存在は想定しがたい。おそらく拠点集落の運営は、住居群の代表者達が共同で参与し決定するようなものであったと考えられる。

拠点集落の墳墓は、周溝を共有するような形で梯形古墳が接続して築造されるものであり、徐々に規模の格差が生じるようになる。拠点集落の構成員の中には、生業形態のような生産活動の従事者の他に、鉄素材の流通や鍛冶生産にたずさわるような新たな従事者や対外交流に関連する専門商人なども登場する。このような拠点集落の実態に具体的に迫るために、潭陽台木里・應龍里태암遺跡を事例として取り上げる。

(2) 拠点集落の事例—潭陽台木里・應龍里태암遺跡

潭陽台木里・應龍里태암遺跡は、3 次にわたる発掘調査〔호남문화재연구원 2007・2010, 기호문화재연구원 2015〕と試掘調査〔대한문화재연구원 2016〕を通して、全貌が明らかになりつつある馬韓小国の都市遺跡である。現在までに明らかとなった都市遺跡の範囲は、南北 2km、東西 1.6km、面積 1,200,000m²（363,000 坪）に達し、非常に高大な遺跡規模であることがうかがえる。この遺跡に対する 4 次にわたる試・発掘調査によって、最低でも 2,000 棟以上の堅穴住居址（1,000 余棟は内部調査が完了）と古墳 79 基、堅穴遺構 83 基、溝 26 基、倉庫施設 7 基、土器窯 1 基などが確認された。

居住生活の空間（居住空間）は、現在の高敞—潭陽高速道路の本線区間と北光州 IC 区間の南東側区域を中心に明らかとなっている。その一方で墳墓を築造する空間（墓域）は、その北東側の区域に広がっており、生と死の空間が区分された景観を成して営まれていることがうかがえる（図 1）。

1) 都市の人口と景観

住居空間を検討すると、10 棟程度の住居がひとつの群を成しており、それが一定の空き地を境界として、10 ヶ所以上群集するような景観を復元できる。また、住居址の重複が 5 回以上確認できる例が相当数を占めており、馬韓小国段階に集落が形成された後、長期間にわたって存続していたことがうかがえる。都市遺跡の中心時期は、紀元後 2 世紀～5 世紀前半に該当する。

ひとつの住居址の平面積はおよそ 30m²（9 坪）程度であるが、重複部を勘案すると 80m²（24 坪）程度に算出できる。特に住居址が密集する地点が、2,500m²（756 坪）程度の範囲で認められ、その範囲を、ひとつの住居址当たりの平面積 80m² で割り振れば、およそ 31 棟程度の住居址が同時に共存していたとみることができそうである（図 2）。

このことを土台として、都市遺跡内部に同時に居住した構成員の数を試算してみた。発掘調査を通じて明らかとなった 2,000 余棟の住居址が占有する平面積は、調査区域（156,365m²）の半分に

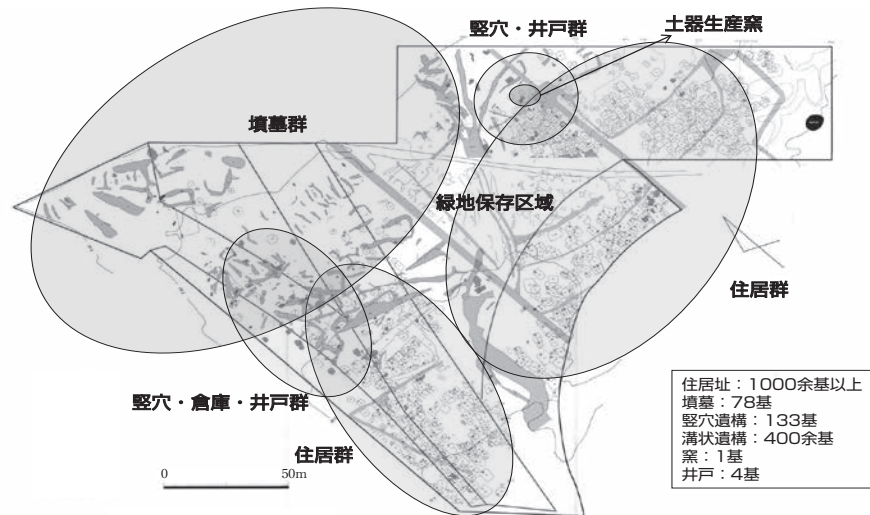


図1 潭陽台木里遺跡の遺構の現況図



図2 台木里遺跡本線区間における遺構分布図 (□: 50m × 50m)

あたる $80,000\text{m}^2$ 程度である。この面積に住居の密集率を適用してみると、1,000 棟程度の住居址が共存していたという仮定を示すことができる。そして、いまだ発掘調査が行われていない区域にも、住居址が広がっている可能性が高いことを勘案すれば、この1,000 棟という仮定は、最大値ではなく最小値に近い。1 棟の住居に居住した人を4名と仮定した場合、最低でも4,000名程度の人口がこの都市遺跡で生活していたと考えてみる事ができる [이영철 2016a・b]。

紀元後3世紀に記録された『三国志』魏書東夷伝韓条には、「馬韓の大国は一万余戸、小国は数千戸（家？）の人家があり、馬韓全体では十数万戸になる」と記述されている。無論、この記録を正確な統計資料とみることはできないが、小国が数千戸（家？）の人家で構成されていたという点は、注目できる。

4,000 名の人口と 1,000 棟の住居によって構成されていた台木里・應龍里태암遺跡は、馬韓小国の中心地の候補として有力である。潭陽地域が位置する榮山江上流域において、これまで発掘調査された集落遺跡は相当数にのぼるが、これほどの規模を誇る遺跡は確認されていなかった。したがって、筆者は台木里・應龍里태암遺跡一帯を、馬韓のひとつの小国の中心部（中心邑落）である都市遺跡として比定している。

次に、馬韓小国の都市遺跡の景観を、台木里・應龍里태암遺跡から復元してみたい。まず、榮山江本流沿いの南東側の区域を居住空間、大田川に接する北西側の区域を墓域と大きく区分される景観を、巨視的に復元することができる。住居空間と墓域の間には大溝が走り、2つの空間を区分している。住居空間が河川に沿って広がる理由は、飲み水の確保や、選択のような日常生活の便利性を考慮するとともに、水路を利用した物資の移動に便利な交通路に接しているという点に求められよう。また、墓域を住居空間の外郭である北西側に設けた理由としては、死者が都市をのぞみつつ子孫の安寧を保護してくれる、というような思想的な願いのためではないか、と考える。

居住空間は上述のように、10 棟程度の住居で構成された住居群の間を道が走っており、小さな広場のような空き地に、ソッテ（突台）や大木を立てて、集落の共同行事や祭祀が行われたと考えられる。また、玉や鉄器生産の工房とともに、日常土器を生産する窯も確認され、農事に必要な種や雑穀を保管する倉庫施設も備わっていた。

以上のように、居住空間には構成員が衣食住を行う住居址を基本として、工房址、倉庫施設、広場、貯蔵施設、土器窯などが備わっていた。土器窯は都市内部で消費する日常容器を生産していたと考えられ、工房では装身具用の玉、鎌・斧・刀などの鉄器類を生産している。そして、おそらく倉庫施設は共同で運営していたようである。

また、居住空間の北西側に墓域が設定され、梯形墳という伝統的な墳墓を築造し、そこに木棺や甕棺を複数副葬するという葬墓文化を営んでいた。古墳群は、居住空間における住居群の分布と同様に、一定の単位を抽出することができる。おそらく、都市遺跡の中において、家系が相異なる集団が、共存して同じ墓域を利用していたと判断される。

1,000 余棟の住居址は、規模や構造、空間的な位置関係において、類似した様相をみせるが、図 3 のグラフを検討すると、住居群ごとに中型クラスの住居址が存在することがうかがえる。このような住居群を代表する中型クラスの住居址は、相互に類似した規模を示しており、都市遺跡を管掌する特定の有力者（長師・臣智・邑借）の存在を論じることは難しい。このことは、中心邑落規模の都市遺跡を管掌する主体が特定個人ではないことを傍証しており、古墳の規模や内容からもあまり格差を観察しえない状況と相通ずる。この点については、上述の「国の邑に主人（主帥）はいるけれども、邑落が入り混じっていて、なかなかうまく統轄できない」という『三国志』魏書東夷伝韓条の記述が参考となろう。おそらく、都市遺跡の運営はそれぞれの住居群を代表する者が、共同で重要事項を決定するような形であったと考えられ、その意味で共同体社会であったとみることができる。

2) 古墳被葬者の位相

遺跡の北西側区域には、都市遺跡が成長と隆盛を誇った紀元後 3～4 世紀にかけて、集中的に 79

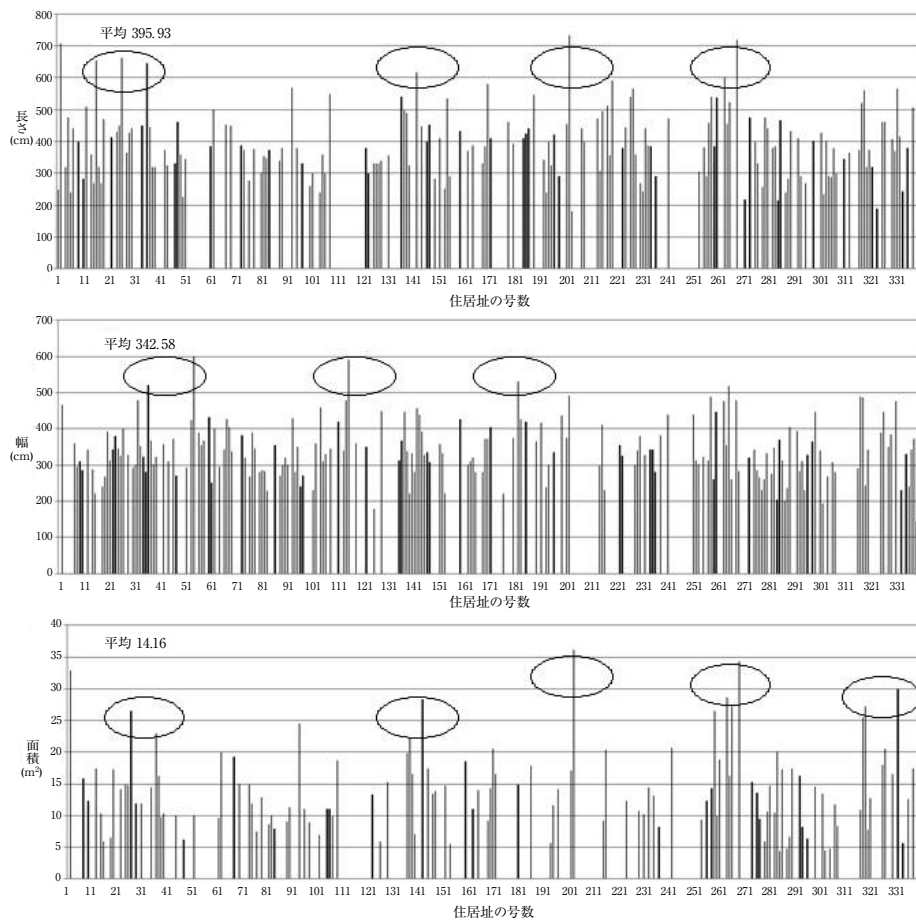


図3 台木里遺跡における住居規模の比較

基もの古墳が築かれた。古墳は一定の空間を置いていくつかの群を成しており、長軸の方向を基準とすると、最低でも7群以上を想定することができる。いまだ調査されていない区域をふくめると、10群以上は想定できそうであり、これは、居住空間における住居群の配置構図とよく類似している。一部には、墳長30～40m規模の大型墳も確認できるが、これは後に墳丘を水平方向に拡張したものである可能性が高く、最初に築造された時の古墳の規模は大同小異であったと考えられる。各群の規模を比較しても、格差は確認しがたい。

被葬者は甕棺や木棺に安置されており、その規模や位置関係を観ても、突出した人物を見出すことは難しい。それは古墳の副葬品の比較においても同様である。栄山江流域において古墳が高塚化する以前には、集団内部もしくは地域共同体における優越的な特定個人・集団の成長を想定することは難しいという見解〔김낙중 2012〕と一致する。

3) 住居類型と構造

この節の最後に、住居類型を通して集落構成員の出自や性格について検討してみたい。住居類型は平面形態によって区分でき、馬韓圏域に該当する全南西南部地域（潭陽—長城—光州—咸平—靈光—務安—靈岩—海南—康津—長興—完島—珍島）は、方形系の住居址が圧倒的多数を占める反面、

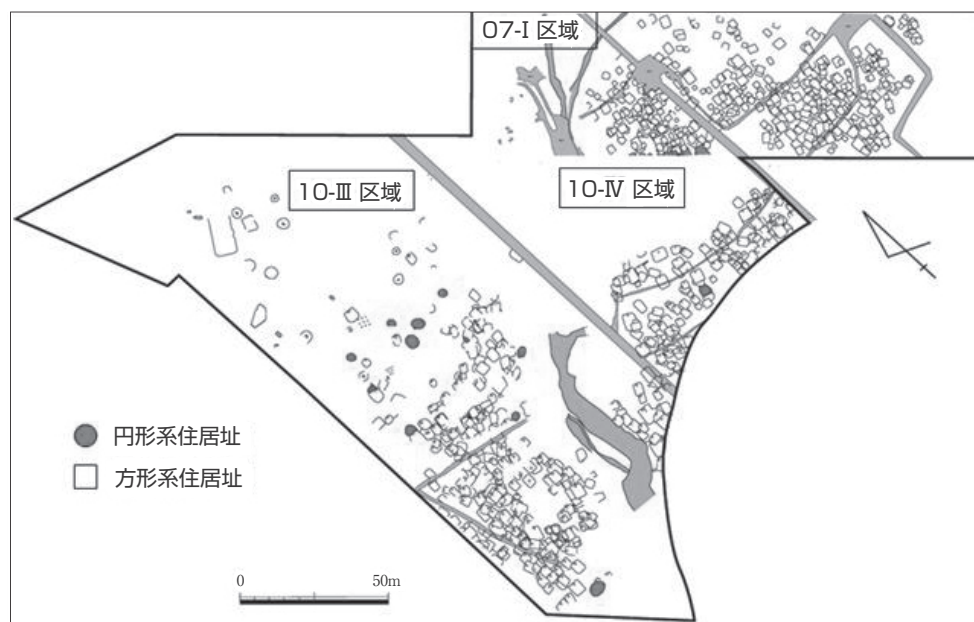


図 4 台木里遺跡における住居類型の配置図

弁韓との境界地域である全南東部地域（寶城—谷城—求禮—順天—光陽—麗水）では、円形系の住居が盛行する。

果たして台木里・應龍里대암都市遺跡では、方形系と円形系の住居址が混在している。無論、方形系住居址が多数を占めるが、その中で 11 棟の円形系住居址も確認された。

住居類型が混在する状況は、榮山江流域における集落遺跡では非常に少ない。光州龍谷 A [호남문화재연구원 2009]・鰲仙洞 [대한문화재연구원 2014] などの集落遺跡では類似した状況が確認されたが、それでも円形系住居址は 2, 3 棟にすぎない。台木里・應龍里대암都市遺跡において確認された住居類型の混在の背景は、榮山江と蟾津江の結節点という地政学的位置に求めることができようである。すなわち、2つの文化圏の住居類型が混在した都市遺跡は、小国の中心地であり、また交易の中心地でもあったといえよう。都市遺跡の構成員の大部分は、馬韓の人びとであったが、蟾津江文化圏から移住した人びとも共に居住していたと考えられる。加耶系土器が遺跡から出土した理由も、ここに求めることができよう（図 4）。住居構造をみると、非四柱式が圧倒的多数を占めるのに対し、四柱式は全体の 6% にすぎない [강귀형 2013]。この点も、四柱式構造が一般的な榮山江流域の状況とは大きく異なる点である。

2. 百濟地方都市の景観と構造—光州東林洞遺跡を事例として

榮山江本流を遡上していくと、光州新昌洞遺跡（史蹟 375 号）をのぞむ極樂川と無等山を発源地とする光州川が合流する地点に、沖積台地が広がっている。榮山江流域における代表的な百濟地方都市の遺跡として注目を集める光州東林洞遺跡が位置する地点である。この遺跡の位相と重要性については、すでにいくつかの論考 [이영철 2009・2011・2013a・2013b・2014・2016b] で述べているが、

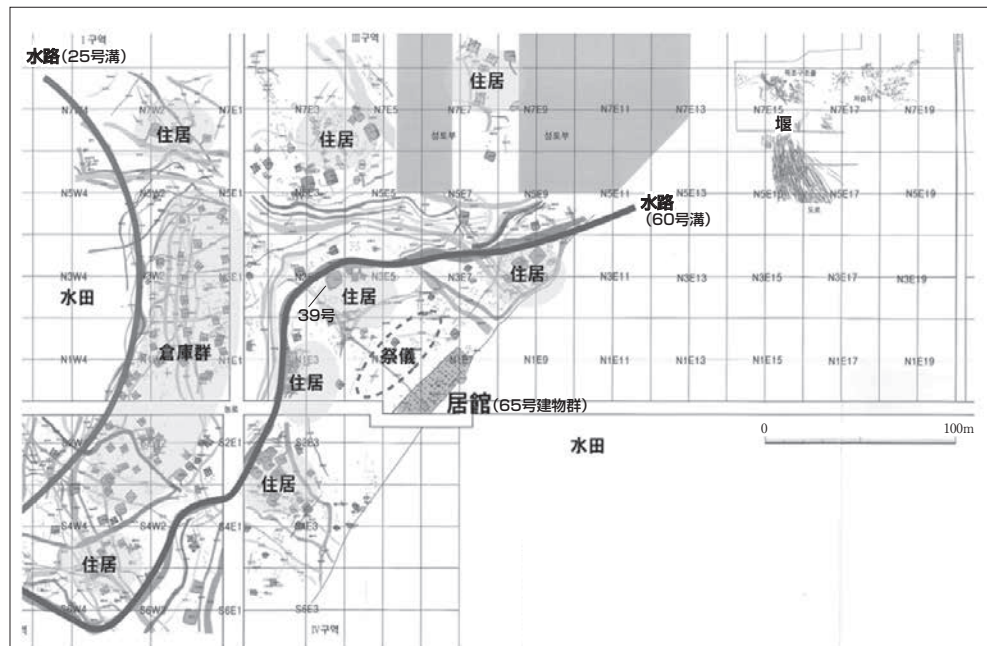


図5 光州東林洞遺跡における住居単位の構造

それをまとめる形で百済地方都市の景観と構造について整理してみたい。

光州東林洞遺跡では、88棟の住居址をはじめ、木造建物址群（複数の高床建物が群を成す）、倉庫施設、貯蔵穴、導水施設、井戸、道路、人工水路、水利施設などの住居単位が集まって構成された都市遺跡である（図5）。硬質無文土器段階以降、住居址が確認されない空地であったが、5世紀中葉を前後した時期に、都市の規模を備えた中心集落[이영철 2011]が営まれるようになった。光州川の河岸の沖積台地に建設された百済の地方都市は、栄山江流域圏における地域勢力の統合を企図したものと考えられる。また、遺跡一带は、栄山江水系の内陸の帰着地にあたり、かつ蟾津江水系へ至る鳥羽口でもある。したがって、ここを基盤として蟾津江水系沿いを走り漢城へと伸びる内陸交通路の確保も可能となった。

1) 都市の景観構造と有力者の性格

都市遺跡の中心部には、長さ50m、幅12m程度に区画された空間が設けられており、一般構成員の居住空間とは厳格に区分されている。特定の有力者（主人公）は、その内部に位置する65号建物支群（5棟の高床建物）に居住していたと考えられる。この建物支群は区画された空間の中央に位置し、中央の大型建物は桁行6間×梁行4間（15m×9m）を誇る。実際の柱穴は35基確認された。この建物の両側に桁行3間×梁行4間（8m×7.2m）の中型の建物2棟が位置し、さらにその両外側に、3間×2間（5.5m×4m）の小型建物2棟が位置している。特に大型建物の桁行は15mに達し、大型の竪穴住居址の最大規模が一辺10m程である点を勘案すると、その位相をうかがい知ることができよう。低湿地で出土した屋根材は檜皮であり、これは古代日本では主要建物によく用いられる屋根材である。

このように、長さが 50m に達する区画の内部に建てられた 5 棟の高床建物に居住していた人物は、地方都市の運営を総括する特定有力者と考えられ、その影響力は榮山江流域の全域におよんでいた可能性が高い [이영철 2009]。

都市内部の景観を検討すると、いくつかの興味深い状況が確認でき、それを列挙してみたい。まず 65 号建物跡群は、光州川に沿って都市遺跡へと進入する際の入口部正面に位置している。また、65 号建物支群を基準として、都市遺跡の中央と外縁部に溝（60 号溝と 25 号溝）を縦横にめぐらせることで、都市の内部空間を細分している。

60 号溝で囲まれた地区では、5 ヶ所の住居群が一定の間隔を置いて配置されており、その中央にあたる住居群には一辺 9m 規模の百済系壁柱式（39 号）が位置する。この住居址では鑄造鉄斧を初め鎌、刀子などの鉄器類が出土した。65 号建物跡群の次の位相にあたる有力者が居住していたと考えられる。

次に、住居群と 65 号建物跡群の間（直線距離で 50m 程）には、広場が設けられている。広場の外側を半円状に 3, 4 重の溝がめぐらせることで、一般の居住空間から遮蔽している。一般の居住空間には 2 か所の貯蔵穴群が備わっている。

そして、60 号溝の外側には 4 ヶ所以上の住居群が配置されており、それとは別に倉庫群の区域も配置された。倉庫施設は直線状、または 5 棟程度の群を成して建てられている。倉庫群の区域の西側は、集落の外縁に沿って南北にのびる 25 号溝によって区切られている。さらにその外（西）側には、水田、畠などの農耕地が広がり、水利施設（堰）との関連性がうかがえる（図 5）。

以上のような東林洞都市遺跡の景観と構造は、現状では榮山江流域における集落遺跡で唯一の事例である。都市遺跡を運営する特定有力者は、64 棟に達する倉庫施設を管理していた人物であろう。その人物は、河岸の沖積台地を開拓し、灌漑水路と道路、水利施設を開設し、構成員の居住空間を設けてそれを差別化し、井戸を掘ることで構成員の飲み水を確保することを主導したと考えられる。さらに、導水施設において水辺祭祀も主管していたようである。

そして、大規模な倉庫施設を準備することで周辺地域から多種多様な物資を集めて管理していたのであろう。その管理に中間管理者が置かれていた可能性は高い。おそらく取り集めた物資の中には、百済中央へ納められるものも含まれていたと考えられ、ここに地方都市建設のもうひとつの目的があり、この点から考えれば、地方都市建設を主導した人物は、百済王権ないしは中央勢力との直接的な関係を結んでいたことは明らかである。

2) 都市の機能

以上のように、東林洞都市遺跡は、榮山江流域の地域社会の統合のために建設された一種の行政都市であった。くり返しになるが、60 棟をこえる倉庫施設の区域は、榮山江流域において生産された農産物や手工業製品を保管・管理する空間である。このことを傍証するのが、3,500 点に達する出土遺物の中に、現地で製作された器物は無論のこと、百済系、加耶系、倭系、高敞地域系の器物が含まれている点である。膨大な量の器物が都市の内部のみで消費されたとは考えがたく、相当量の物資は百済王室や官僚への貢納物であったろう。ソウル風納土城や公州艇止山遺跡をはじめとする百済圏の諸遺跡において、榮山江流域産の土器が出土する理由がここにある。また、多量の

日本の須恵器や小加耶系土器の存在は、都市遺跡に形成された市への参与や交流に従事した加耶人や倭人の居住を想定し得る。遺跡を南海岸―西南海岸―栄山江と続く物流の拠点地 [하승철 2012] として注目する理由もここにある。

以上のように、東林洞都市遺跡は栄山江流域の地域社会に対する百済の新たな秩序を樹立するうえで、相応の役割を担ったのであろう。

③……………集落の景観と構造における変化の背景

前章において、馬韓時期に都市的な規模を備えた潭陽台木里・應龍里遺跡と、百済領域化の後に新たに営まれた光州東林洞遺跡を分析し、集落の景観と構造を検討した。この2つの集落遺跡の分析において明らかとなった景観や構造における差異は、5世紀中葉を前後する時期を境として明確となり、他の集落遺跡においても追うような現象を確認できる。すなわち、特定の遺跡や地域単位に限定したものは考えがたく、栄山江流域全域において広く確認されるものである。それでは、このような変化の背景は何であろうか。

高塚古墳の築造が本格的に進む5世紀中葉以後は、韓半島南部を掌握していた百済・新羅・加耶地域と日本列島の間において、どの時期よりも活発な交渉関係が積み重ねられていた時期である。国家段階に進出した諸政治体が、地域単位の次元ではなく、国家的な次元において国際的な外交関係を繰り広げていた時期であった。このような国際情勢の中で、栄山江流域の地域社会も対外活動に参加するようになった。高句麗や新羅との領土戦争が熾烈であった百済としては、加耶は無論、日本列島の勢力との関係形成に従事した。日本列島との関係形成に力を注いだ百済は、特に西・南海沿岸交通路の要衝地である栄山江流域勢力を掌握していくことが不可避的な課題であった。このような動きの結果が、光州東林洞集落遺跡のような地方都市の建設であったろう。光州東林洞集落遺跡は、栄山江水系のみならず蟾津江に連結する内陸交通路へと続く天恵の要衝地である。栄山江水系において確認される拠点集落の中で、特に上流地域の拠点集落において大規模な倉庫施設を備えた景観は、百済の国際的なネットワーク形成の背景を代弁する考古資料として評価できる。

かつては、大規模な倉庫施設が運営される拠点集落の景観は、主に日本列島の集落類型においてのみ見出されていた。大阪府法円坂遺跡や和歌山県鳴滝遺跡などは、5世紀代の倭王権直属の倉庫群を備えた代表的な集落遺跡として知られている [都出 1991・2005, 권오영 2008]。法円坂遺跡の倉庫群は、膨大な量のコメを蓄積する租税を取り集める機構の存在を想起させ、王権の実態を理解するうえで重要な考古資料である (図6)。

最近、漢江や錦江水系において確認される百済漢城期の河南羨沙里、牙山葛梅里、平澤細橋、清原蓮堤里、華城旗安里、燕岐羅城里などの拠点集落の多くは、区画された都市景観の中で、大規模な倉庫施設を備えている。これらの拠点集落は、百済の地方支配の過程において拡張されたり、新たに建設された集落遺跡である。これと類似した集落の景観と構造を備えて出現した東林洞遺跡もまた、百済王権または中央勢力との関連性を有していることは再論の余地がない。

百済は栄山江流域を含む南方の地方統治を強化する目的のもとで、地方都市の建設に関与し、馬韓の伝統社会の変化を誘導したと考えられる。そのひとつが、地域単位勢力において認められる階

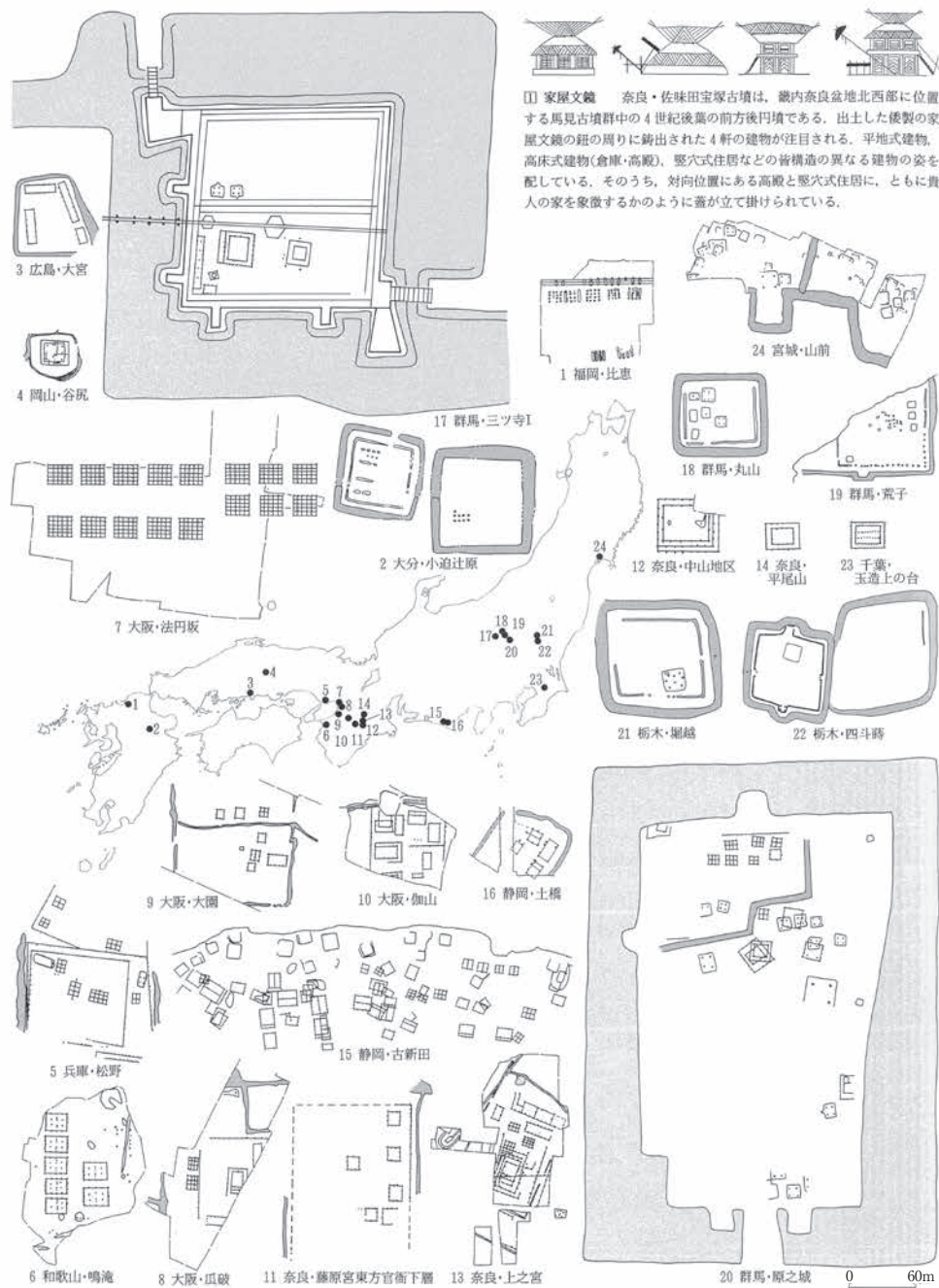


図6 古墳時代の豪族居館と関連遺跡

層化である。このことは、栄山江流域の地域単位勢力の中心たる拠点集落において、集落の運営を管掌したと想定される特定有力者の多くが、百済系の壁柱式建物に居住している。このような点は、地域単位別に成長を遂げた拠点集落が、百済中央勢力との直接的な関連性を有していたことを示しており、この特定有力者は、百済中央と関連する地方官人層〔권오영・이형원 2006〕であった可能性が濃厚である。

このような人物が拠点集落を管掌し、集落構成員の間の階層化を加速化させ、以前の水平的（並

公州水村里一帯に、百済の地方支配の新たな拠点が形成される現象〔박순발 2014〕とも同じ脈絡で理解することができよう。すなわち漢城以南地域における百済の領域拡張にともなう動きとして、地方都市の成立背景を把握することができる。

おわりにかえて—6世紀における榮山江流域の地域社会

その後、榮山江流域の地域社会と百済中央との関係は、熊津期の 6 世紀初め頃に新たに再編されるようである。この時期は、榮山江上流域に集中し成長を遂げていた拠点集落が、急速に衰退していく時期と重なっている。5 世紀中葉を前後した時期には、このような拠点集落は集積都市（Agglomeration City）化し、鉄器や土器、玉などのような手工業製品の生産を主導することで、地域社会の中心勢力としての成長を遂げる。その一方で、榮山江流域の古代文化の中核地として知られる羅州潘南面や伏岩里一帯などの榮山江中流域では、上流地域にみられるような拠点集落の成長の内容が明らかになっていない。羅州伏岩里一帯において確認される拠点集落（浪洞・タシドゥル集落）の場合、5 世紀末頃に盛行しており、上流地域よりも四半世紀程度遅れて成長を遂げるようである。

中流域の勢力が成長する 5 世紀末は、実は上流域の拠点集落の斜陽化〔rust belt 앤드류 리즈 2017〕の時点と一致している。すなわち、上流地域の拠点集落の衰退が、羅州潘南面や伏岩里を中心とした中流域勢力の成長に拍車をかけた可能性がある。これは、榮山江流域の地域社会を主導した地域勢力の移動として理解可能な部分である。

今後より慎重な検討が必要ではあるが、このような変動は、漢城陥落と熊津遷都という歴史的イベントと関連づけて解釈することが可能ではなかろうか。百済漢城期の中心勢力との密接な関係の中で、榮山江流域の地域社会を主導した上流域の勢力が、漢城陥落とともにその主導権を喪失した反面、羅州潘南面や伏岩里一帯の中流域の勢力が、熊津・泗沘期の中央勢力と新たな関係を形成することで、榮山江流域の地域社会の中心となったと考えられよう。朝鮮半島において築造された前方後円墳が、6 世紀を前後した時期に榮山江上流域に集中して築造され、後に終焉をむかえる動きもまた、同様な脈絡の中で解釈が可能と考える。

参考文献

（韓国語）

- 강기형 2013 『담양 태목리취락의 변천 연구』 목포대학교대학원 석사학위논문
권오영・이형원 2006 삼국시대 벽주건물 연구』 『한국고고학보』 60 한국고고학회
권오영 2008 「백제의 생산기술과 유통체계 이해를 위하여」 『백제생산기술의 발달과 유통체계 확대의 정치사회적 함의』 학연문화사
권오영 2012 「백제 한성기의 도성과 지방도시」 『고고학』 11—3 호 중부고고학회
기호문화재연구원・담양군 2017 『담양 용흥리 유적』
김낙중 2009 『영산강유역 고분 연구』 서울대학교대학원 박사학위논문
김낙중 2012 「영산강유역 고대사회의 성장과 변동과정—3~6세기 고분자료를 중심으로」 『백제와 영산강』 학연문화사
김낙중 2013 「『역사도시의 세종시 1 (삼국—통일신라)』에 대한 토론문」 『세종시 어제 오늘 그리고 내일』 제 27 회 호서고고학회 학술대회 호서고고학회
김승옥 2000 「호남지역 마한 주거지의 편년」 『호남고고학보』 11 호남고고학회

- 김승옥 2013 「취락으로 본 전남지역 마한 사회의 구조와 성격」 『전남지역 마한제국의 사회성격과 백제』 2013 년백제학회국제학술회의 백제학회
- 노중국 2012 「문헌 기록으로 본 영산강유역—4~5 세기를 중심으로」 『백제와 영산강』 학연문화사
- 노중국 2014 「한성백제의 지방통치제도에 대한 종합적 검토」 『백제의 왕권은 어떻게 강화되었나』 ‘쟁점백제사’ 집중토론 학술회의Ⅳ 한성백제박물관
- 대한문화재연구원 2016 『담양 응용리 태암유적 시굴조사』 학술자문회의자료집.
- 대한문화재연구원 2018 『光州 오선동유적』
- 박순발 2014 「백제 한성기의 지방도시」 『백제의 왕권은 어떻게 강화되었나—한성백제의 중앙과 지방』 한성백제박물관 백제학연구소
- 서현주 2012 「영산강유역의 토기 문화와 백제화 과정」 『백제와 영산강』 학연문화사
- 앤드류 리즈 2017 『도시문명의 꽃』 다른세상
- 이영철 2004 「웅관고분사회 지역단위체의 구조와 변화」 『호남고고학보』 20 호남고고학회
- 이영철 2006 「영산강유역 삼국시대 취락연구의 현황과 과제」 『한일취락연구의 현황과 과제』 한일취락연구회
- 이영철 2009 「백제 수취취락의 일례」 『현장고고』 1 대한문화유산연구센터
- 이영철 2011 「영산강 상류지역의 취락변동과 백제화 과정」 『백제학보』 6 백제학회
- 이영철 2013a 「거점취락 변이를 통해 본 영산강유역의 고대사회」 『한일취락연구』 서경문화사
- 이영철 2013b 「호남지역 원삼국~삼국시대의 주거·주거군·취락구조」 『주거의 고고학』 제 37 회 한국고고학전국대회 한국고고학회
- 이영철 2014 「백제의 지방지배—영산강유역 취락자료를 중심으로」 『2014 백제사연구 쟁점 대해부』 2014 년 8 월 백제학회 정기발표회 백제학회
- 이영철 2016a 「담양 태목리·응용리 태암유적의 성격과 가치」 『담양 태목리·응용리 태암유적 국가사적 지정추진 국제학술회의』 대한문화재연구원·담양군
- 이영철 2016b 『영산강유역 고대 취락 연구』 목포대학교 박사학위논문
- 이홍중 2011 「한성백제기 지방의 도시구획—연기 나성리유적의 검토를 바탕으로」 『한일취락연구의 전개』 한일취락연구회
- 이홍중·허의행 2014 「한성백제기 거점도시의 구조와 기능—나성리유적을 중심으로」 『백제연구』 60 충남대학교 백제연구소
- 하승철 2012 「토기와 묘제로 본 고대 한일교류」 『아시아의 고대 문물교류』 중앙문화재연구원
- 하승철 2014 「전남 서해안지역과 가야지역의 교류양상」 『전남 서남해지역의 해상교류와 고대문화』 전라남도·전남문화예술재단 전남문화재연구소
- 호남문화재연구원 2007 『담양 태목리유적 I』
- 호남문화재연구원 2009 『광주 용강·용곡·금곡유적』
- 호남문화재연구원 2010 『담양 태목리유적 II』
- (日本語)
- 都出比呂志 1991 「日本古代の国家形成論序説」 『日本史研究』 343 日本史研究会
- 都出比呂志 2005 『前方後円墳と社会』 塙書房
- 橋本博文 1992 「住居と集落」 『図解・日本の人類遺跡』 東京大学出版会

挿図出典

(いずれも一部改変)

図 1・4 : 강귀형 2013

図 2 : 이영철 2016b

図 3 : 図 4 : 이영철 2014

図 5 : 이영철 2013a

図 6 : 橋本 1992

図 7 : 筆者作成

(大韓文化財研究院, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2018 年 5 月 24 日受付, 2018 年 12 月 10 日審査終了)

The Landscape and Structure of the Ancient Settlements in the Yeongsan River Basin

LEE Youngcheol

This paper aims to analyze the landscape and structure of the ancient settlements in the Yeongsan River basin. Specifically, using historical documents and some of the settlement ruins, I examined the transformation that the landscape of the settlements had undergone through the stages when the Yeongsan River basin (Mahan) was gradually converted into Baekje.

First, I analyzed the landscape and the structure of the settlements in the Mahan period. Featuring characteristics of the Mahan-type dwelling sites, there are a four-post type with a rectangular plane figure and a housing structure with the facility of wall-grooves without pillars. From the size and contents of the settlements, it is possible to classify them into general settlements and base settlements, and the latter were formed at the chief port (or in a place where the chief port is assumed to have been) of the mainstream Yeongsan River and at the end of each river branch. Furthermore, to review typical base settlements, I considered the Damyang Taemok-ri/Eung Ryong-ri (태암) ruins and introduced their detail, highlighting their character as the center of one small country of Mahan.

It was after the mid-fifth century when the landscape of such Mahan settlements underwent a big transformation. As an example of this, I examined Gwangju Dongshin-dong ruins in the Yeongsan River basin and grasped the character as one of the “regional Baekje cities,” while introducing the satisfying size and content of the settlement, the important location in terms of transport, the various facilities, and the sections seen in the central part of the settlement. I concluded that the person (or the group) who led the city construction formed a direct relationship with the Baekje Kingdom, and there was a plan in the background to unify the society of the Yeongsan River basin (Mahan confederacy) by Baekje.

Finally, I pointed out the situation where the Takatsuka tumuli and settlements spread all over Naju Bannam-Myeon and Fuyan-ri in the middle basin of the Yeongsan River while the base settlements of the upstream area of the River declined rapidly around the beginning of the sixth century. I then highlighted the possibility that such changes were linked with the historical incidents such as the fall of Seoul and the transfer of the capital to Ungjin.

Key words: Yeongsan River basin, Mahan and Baekje, ancient settlement, regional Baekje cities
